

九 我が家業唯一筋の道をこそ

新たに擔いだ板を途中で卸してはならぬ。熱心に其の道に心を留むれば、屹度板は擔げるものである。若存若亡と云つて、なまぐらの不徹底ではなりませぬ。

禪宗で名高い達磨和尚。達磨とて、雪や張子の玩具ではない、眞の生きた和尚さんが居られたのです。此和尚、崇山の少林寺と云ふお寺で、愚痴つか拗たか、壁に向つて坐つたきり、ウンともスンとも云はず、九年間凝然として居られます。そこへやつて來たのが、神光と云ふ人です。聲をかけても怒鳴つても、盲目か聲か返事もなければ、見向きもしない。けれども、神光はこの和尚にぜひとも佛法が聞きたいと、毎日くやつて來る。來てもく此の和尚知らぬ顔。衝いても押しても動きさうもない有様。神光も神光、どこの和尚でもよささうなものを、是非にこの和尚と、兩擔板漢でやつて來る。愈今日こそはと、思込んで尋ねたのが十二月の九日。上り上つて神光は入口に立つて動かない。和尚と根機比較です。

折柄頻と雪が降り出して、日は暮れかゝる。寒さは寒く淋しさも一層である。雪は段々積つて日はとつぷり暮れてしまひ、お庭の植木は雪の綿帽子を被つて居る。石地藏様のやうに屹立つた神光の膝は、雪に隠れてしまひ、頭にも肩にも雪は五寸も溜つて居る。けれどもビクともしない。石臼のやうに座り込んだ達磨さんと、石地藏のやうに立ちすくんだ神光と、全然石と石との寄合。壁に向いた達磨、達磨に向いた神光、どちらも息が通つて居るかど怪しまれる位。風は身を切る如く、寒さは沁徹るやうな中に、遠慮もせず雪は積んで二尺三尺、腰を埋むる程になつたが、さてびくともせぬ。漸くにして求むる人の誠は届いたのか、「お前久しく雪の中に立つて居る、何ぞ用かよ」

何ぞ用かもあつたものか、和尚様の空惚には程がある。聲をかけられて神光は嬉しさにたまらず、「何卒佛法の道理を教へて頂きたい」とお願申す。「何つ佛法の道理、小癩なつ、そんな事で聞かれるものか、馬鹿野郎」とあつて、其儘とりもかまはれない。それでも神光の志は益々堅い。此上はと、有合ふ刃で我と我が臂を切り落して、之を達磨和尚の前にと出した。「ウン馬鹿、臂を切つたのか、佛様方は命を捨てられたぞ」と和尚は愈落着き拂つて居られる。神光は遺瀨なく「それではまだ佛法は聞かれませぬか」「それでも解らぬのか」「私は心配でなりません」「その心配を持つて来い、善くしてやらう」。「エツ善くして下さいますか、ハツそれですつかり安心いたしました、其の御言葉に心配は逃げて、今は喜ばかりです」。

斯様にして神光は頓悟の境に達したから、名を慧可と賜ひ、直に達磨さんの弟子となり、達磨和尚禪法の髓を得て、支那禪宗の第二祖となられた。これで眞實の禪的兩擔板漢となり終つたのである。吾人亦、善知識の言葉の下に、歸命の一念發得する時、能く眞實の實行者となり、善き馬車馬的兩擔板漢となり得るのである。こゝに眞人生の第一歩が開け、我が行く道が嚴然と現はれて来る。慕直去、慕直去。「我が家業唯一筋の道を行け、外見をすれば躓きやせん」